

# 財政比較分析(A 案・B 案) 追補

— 読書テラス改修費 約 3.8 億円と、市の公表資料から分かったこと —

本書は、2026 年 6 月 16 日付「阿南中央図書館整備をめぐる財政比較分析(A 案・B 案)」の追補です。本体の結論は変えていません。その後に阿南市が公表した資料で確かめられたことを 3 点補い、市にうかがいたいことを整理しています。

## 0. 前提:対象施設をどう設計するかは市の判断であること

2026 年 1 月 28 日の市民説明会で、市は、既に機能廃止された 2 館(旧阿南図書館・市民会館)のみを対象としなかった理由を、次のように説明しています。

既に機能廃止された 2 館のみを対象とした場合、事業が国から採択される確実性が低かった。市の公共施設再編計画全体を示すうえで、4 館を対象とすることが評価上必要であったと判断した。

制度上そうしなければならなかったのではなく、市の判断であったことが示されています。本書はこの前提のうえで、A 案(4 施設対象・読書テラス化)と B 案(2 施設対象・2 館存続)の費用を比べています。

## 1. 改修費は約 3.8 億円と公表されました

市は 1 月 28 日の説明会で、両館の改修費用について「本年度末までに公表する」と答え、2026 年 3 月の「図書のまち阿南」構想 23 ページで公表しました。

|          | 改修工事費(概算) |
|----------|-----------|
| 那賀川読書テラス | 約 2.3 億円  |
| 羽ノ浦読書テラス | 約 1.5 億円  |
| 合計       | 約 3.8 億円  |

出典:阿南市「図書のまち阿南」構想(令和 8 年 3 月)23 ページ

ただし同じページに、次のようにも書かれています。

改修費用については、改修工事に合わせて屋内の老朽化対策を実施することも想定し、市が発注した改修工事の実績から概算額を算出しています。

つまり 3.8 億円には、図書館として残す場合にも必要となる老朽化対策(長寿命化)が含まれています。読書テラスにするために追加で必要な分がいくらなのかは、公表資料からは分かりません。

▶ **確認したいこと** 約 3.8 億円のうち、建物の老朽化対策にあたる分と、読書テラスへの機能転換にあたる分は、それぞれどの程度でしょうか。

## 2. 改修費の財源は「転用事業」と明記されました

同構想の 25 ページには、改修費の財源が次のように示されています。

読書テラスへの改修費用についても有利な財源の確保が不可欠なことから、「公共施設等適正管理推進事業債」の転用事業の活用することにより、最大限市の負担軽減を図ります。(充当率 90%、交付税措置 30%~50%)

本体(6 月 16 日)では、A 案の改修財源を集約化区分(交付税措置 50%)と想定して試算していました。市が示したのは転用事業で、交付税措置には 30%~50%の幅があります。30%であれば、A 案の財源上の有利は本体の試算より小さくなります。

あわせて、転用事業は「他の用途への転用」を行う事業を対象とする制度です。両館を図書館のまま残すこととは両立しません。財源の選び方と、両館を図書館として残すかどうかは、切り離せない関係にあります。

▶ **確認したいこと** 転用事業の交付税措置は、30%と 50%のどちらを見込んでおられますか。また、両館を図書館として残す場合に長寿命化区分を用いる選択肢は検討されましたか。

## 3. 年間の差と改修費を合わせて見ると

市の公表値では、A 案と B 案の年間維持管理費の差は約 9,440 万円です。ただしこの差は、両館から減る

15名の人件費がそのまま消える場合の数字です。もしこの15名が新中央図書館に配置されるのであれば、給与は引き続き必要になり、両案の差は年約440万円まで縮まる計算になります。

この年約440万円の差を前提に、A案でのみ発生する機能転換分の改修費を何年で取り戻せるかを試算すると、次のとおりです。

| 機能転換にあたる改修費     | 回収に要する年数 |
|-----------------|----------|
| 約3.8億円(全額とした場合) | 約86年     |
| 約1.9億円(半分とした場合) | 約43年     |
| 約1.0億円          | 約23年     |
| 約0.5億円          | 約11年     |

一方、両館の建物の残り年数は、市の資料では次のとおりです。

|        | 築年数／耐用年数 | 残り   |
|--------|----------|------|
| 羽ノ浦図書館 | 築31年／47年 | 約16年 |
| 那賀川図書館 | 築32年／50年 | 約18年 |

機能転換にあたる分が1億円を超えると、建物の耐用年数が来るまでに費用を取り戻せない計算になります。この点からも、1でうかがった内訳が重要になります。

※ 年約440万円は、15名が新中央図書館に配置される場合の試算です。市の公表資料で確認できていないため、確定した数字ではありません。実際の職員体制をうかがったうえで、あらためて計算したいと考えています。

## 4. あわせてうかがいたいこと

- ・約3.8億円の内訳(長寿命化にあたる分／機能転換にあたる分)
- ・転用事業の交付税措置率(30％／50％)の見込み
- ・新中央図書館の想定職員数を、A案・B案それぞれで。両館から減る15名と図書館カウンターの職員は、新中央図書館に配置されるお考えでしょうか
- ・中央図書館から両館への配本について、入替サイクルと費用の試算

## 5. 本書の位置づけ

本書は市の公表資料をもとにした概算であり、確定値ではありません。数字を断定することが目的ではなく、両館の今後を市とともに考えるための材料として作成しています。内訳や職員体制についてご教示いただければ、その内容を反映して作り直します。

作成 2026年8月 阿南中央図書館(仮称)開館後も羽ノ浦図書館・那賀川図書館を守る会

出典 阿南市「図書のまち阿南」構想(令和8年3月)／2026年1月28日 市民説明会